
少しだけ早足

じゅう・かわせみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少しだけ早足

【Nコード】

N9072E

【作者名】

じゅう・かわせみ

【あらすじ】

好きになった女の子は、学校でも評判の才女だった。拙作「Out Of Eden」の姉妹編になります。

放課後の学校の廊下は肌寒く、秋の深まりを感じさせる。外も既に宵闇に包まれている。

けれども窓ガラスに反射する僕の足取りはそれと無関係に弾んでいた。

目的地である第一理科室の前に立つと、僕はドアの窓から中を覗く。

彼女の姿をそこに確認した僕はドアの窓をコツコツ、と叩いた。

その音に彼女が顔を上げ、僕の姿を見とめるとかすかに目を見開き、微笑んだ。

僕が手を振ると、彼女は頷いて机の上に散在している実験器具や書類を片付けだした。

僕はそのままドアの前で待つ。以前勝手に入ったら怒られたことがあったから。

まもなくパチン、とスイッチを切る音がして理科室から光が消えた。

「お待たせ。それじゃ、行きましようか？」

薬師さんが鞆やぐらを持って現れた。

制服の上には寒さしのぎのカーディガンを羽織っている。僕はそれがとてもよく似合っていると思った。

僕らは並んで夜道を歩き出す。

帰り道が別になるまでのほんの15分間。

でも僕にとっては貴重な15分間だ。

……薬師さんにとってはどうなんだろうか？

「ねえ、カズマ君、昨日の9時からのドラマ見た？」

「昨日？ ああ、近未来を舞台にした2時間半のスペシャルドラマ

「？」

「ええ」

「いや、僕は見なかったよ」

「……そう。いえ、見なくて正解よ」

「なんだ、つまらなかつたの？」

「つまらないとかそういうんじゃない、ものすごく頭にきたわ」

「なに？ 何が？」

「主人公の男が、やたらと科学を否定するような発言を繰り返すのよ。」

『科学の発展は人々の生活を便利なものにしたが、そのかわり何か大切なものを失ってははいないだろうか』とかね。全く。バカバカしいっいたらありゃしない」

「ああ、なるほど」

薬師さんらしいな、と思って僕は苦笑しながら頷いた。

「私は大嫌いな。科学の恩恵にどっぷりつかっておきながら、それに気づきもしないで文句だけ言うような人はね」

「まあね」

「便利な暮らしが人を堕落させたなんて、見当違いも甚だしいわ」

「でも人は楽なものを見つけるとそっちに寄りかかっちゃうって言うのは確かだよ」

「それは個人個人の問題でしょ？ 科学が行なったのは人の選択の幅を広げただけ。科学に頼りたくない人は頼らなければいいのよ。」

科学に責任を押し付けるのはお門違いだわ」

「そりゃそうだ。薬師さんの言ってることは正しい。この世には科学に頼らざるを得ない人だっているんだからね」

「そうでしょう？ ……ああ、いいこと言っただわ、カズマ君。そう。科学は弱い者の味方なのよ」

「科学の知識が少ししかないくせに、科学の限界を声高に叫ぶのにも腹が立つわ。鬼の首でも取ったかのようにね。』この世には科学だけで割り切れないことがある』だなんて、あなたは科学の何を知

っているっていうのよ！」

「薬師さん、薬師さん、いない人に怒ってもしょうがないって」

「確かに、自然界には現代科学の範囲では解明できない事象が存在する。でも、それを科学の範囲外と決め付けて思考を止めるなんて怠惰そのもの！ わからないことをわかるようにしようとするのが科学！ 曖昧なものを曖昧なままにしておくのをロマンだ、なんてさも美德のようにいうのは愚の骨頂よ！」

よっぽど昨日のドラマに腹を立てていたのか、薬師さんは随分と熱くなっていた。

薬師さんは感情のままに僕に主張し続ける。

いつもはクールで大人っぽい薬師さんなのに、こんな時は僕よりも子供っぽく見える。

ほんの少し前まで薬師さんのこんな面は全然知ることにはなかった。本当に人の縁というものは不思議なんだよな。

僕は適当に相槌を打ちながら、薬師さんとはじめてまともに会話できるまでのことを思い出していた。

僕が初めて薬師さんの名を心に刻んだのは、浦和高校に入学して最初の試験を受けたときだった。

小学校や中学校での僕は成績は常にトップクラス。親や先生は理系の最高学府である大学の名を上げて僕の将来を語った。

そう言われて僕もいい気になっていたけれど、実際の高校の勉強がそんなに甘いはずもなかった。

それまでは、取ることが信じられなかった低い点数の答案が次々と返ってきて僕は意気消沈。これが高校のレベルか、やっぱり中学校までのペースでの勉強じゃ通用しないか、と思い知らされたのだ。

そして数学のテストが返ってきたときのこと。

数学だけは95点と唯一満足できる点数を取ることが出来たのだ。

けれど、その直後にショックなことが起こった。

数学の松尾先生は答え合わせのときに、一問ずつそれぞれの問題を正解した生徒に解答を板書させるのだけれども僕が唯一間違えた最後の問題を解いたのが薬師さんだったのだ。当然薬師さんは100点だった。

僕が他の生徒の解答を写すなんていうのは初めてのことだったし、ちよつとした屈辱でもあった。

でも、この女の子ならできるのも当然かもな、という印象は薬師さんからバリバリに漂っていた。

なので僕はちよつとした嫉妬も含みながらこの時から薬師さんの動向を気にするようになっていた。

薬師さんは理系の勉強が全般的に得意だったが中でも特に興味を持っているのが宇宙の分野のようだった。

浦和高校に天文部はないので、薬師さんは科学部としての活動をしている。

それというのも北海道への修学旅行にわざわざ天体観測器具を持っていくぐらいの熱心ぶりだったのだから。

その彼女の情熱が報われたというべきか、なんと薬師さん率いる観測チーム（星の観測をすると聞いて10人の生徒が集まった）は新しい天体を発見してしまうことになったのだ。

次の日の北海道の新聞にはその飛行物体のことが掲載され、薬師さんはそれを機にちよつとしたアイドル的存在になった。

……それは、僕にとって、当然だと思ったり、ちよつと悔しかったり。

もっとも薬師さんはそんなことは気にもしていないという態度を取りつつづけていたのだけれど。

最初のテスト以降、2年の2学期になるまで、結局僕は一番得意な数学においてもどうしても薬師さんの点数を抜くことはできな

った。

それどころか僕の成績は全体的に落ちていた。いつのまにか僕の勉強への意欲が落ちていたのだ。

薬師さんにはかなわない。頭の出来が違う。なにしろ薬師さんは僕がとうに諦めた、かの大学を本気で受験する実力者なのだから。

僕自身、僕のやる気が徐々に落ちていることに気づいていた。

けれど運命の神様というのは意外なところで動いた。

中間テストが終わった時のこと。僕のところ薬師さんがやってきた。2年時も僕と薬師さんは同じクラスだった。

「佐伯君、ちよつといいかしら？」

「え？」

いささかドキドキしながら僕は彼女を見た。

「今日返してもらった数学の答案：見せてくれないかしら？」

「え？ ど、どうして？」

「問6の解答：教えて欲しいんだけど」

あの時の衝撃は、ちよつと言葉だけでは伝えきれない。

何しろ自分が絶対敵わないと思っていた人物から教えを乞われたんだから。

正直薬師さんへの優越感もあつたけれど……。僕はこのとき素直に人に聴く薬師さんが新鮮で、恥ずかしながらもかなりときめいてしまった。

後で分かったことなんだけど、僕がまぐれで解いたその問6は先生がイジワル問題として設定したもので普段授業でやっている正攻法では解きづらいものだったそうなんだ。

総合点ではもちろん敵わなかった僕だけど、薬師さんは随分と僕を評価してくれた。

『普段から柔軟な発想をしていなければ、あの問題は解けないわ』
『あなたとは、もっと数学の話をしたいわね』

それがはじまりで……そして今の状況に至る。

一緒に帰るのがいつのまにか習慣になっていた頃には、話題は勉強の話ばかりではなくなっていた。

話してみると薬師さんは決して勉強の虫というわけではなく、TVや映画もみれば音楽鑑賞もする普通の女の子だということが分かってきた。

まあ、科学部で学校の実験器具を私物化していたりと、ちょっと変なところもあるんだけど。

でも、僕が薬師さんと一緒にいて楽しいことは間違いない。

まだ二人きりになれるのはこの帰宅時間のみ。今はまだこれいい。今は。

「それじゃ、ここで」

今日は薬師さんの愚痴ばかりで15分が終わってしまったけれど、でも楽しい時間だった。

「うん、ここで」

「また明日、ね」

「って言っても僕の方は物理の宿題が残っているんだよなあ。明日提出だから今日は必死にやらないと」

「あら？ カズマ君の物理も伊熊先生だったかしら」

「そうだよ？」

「伊熊先生は明日から週末まで用事ができてその間は自習になるはずよ」

「……マジ？」

「失礼ね。私が嘘を言うんでも？」

「あ、ごめん。そうじゃなくって。何だ、じゃあ、提出も延期か。チクショー、あせってやって損したよ」

僕は何気なくこのセリフを言ったんだけど、それで薬師さんがそんなに怒るなんて思わなかった。

「……カズマ君」

「ん？」

「カズマ君、あなたまで……あなたまで、そこらへんにいる凡人と同じこと言うの？」

「え？ え？ 何？ 薬師さん？ 怒ってるの？ 僕、何か変なこと言った？」

「やって損になる勉強をしているの？ あなたは？」

「……？？」

「だからだと人に言われた分のノルマを果たしていればそれでいいの！？」

「ちょ、ちょっと待ってよ。薬師さん、僕は」

「あなたは何の為に勉強しているの？」

「薬師さん……」

「答えなさい」

「……」

僕は突然のことで言葉が出ず、ただ薬師さんの顔を見つめるしかなかった。

「あきれた……。そんなことも考えず漫然と学校に通って勉強しているの？ カズマ君！？」

「ちょっと待ってよ。そんなこといきなり訊かれても誰も答えられないよ」

「誰も……って」

「そうだよ、誰もそんな深いところまで考えてないよ」

薬師さんは一瞬寂しそうな顔をしたけれど、僕もつい頭に血が上って彼女を気遣った言葉を言えなかった。

「じゃあ……カズマ君、勉強してて楽しくないの？」

「な……勉強が楽しいわけじゃないか」

「だったら何で楽しくもない勉強しているの？ もう一回訊くけれど？」

「そりゃ、しなきゃいけないじゃないか。その……将来のために。」

そつだよ。将来のために高校でいい成績とつて、大学に行つて、就職して」

「いい成績？ 学校のテストでいい点をとるための勉強つてこと？
ハッ、下らないわ」

「どうしてだよ。テストでいい点取る為に勉強することは当然のことじゃないか。薬師さんだつてそうだろ？」

「私はしないわ。テスト勉強なんて」
「うそ？」

「勉強は普段からやつておくものよ。そんなテストが終わつたら消えてしまうような付け焼刃の知識なんて何の意味も無い」

「それは……薬師さんは特別だからだよ。付け焼刃だろうが、とりあえず点数はとつておきたいじゃないか」

「……………」

薬師さんは僕から目をそらし、小さくため息をついた。

「そうね。私は特別だからね」

「あ……………」

「もういいわ。あなたに私の生き方を強制することなんてできないから。ただ、高校生の時つて、一生のうちで一番肉体も精神も活性化できる大切な時なのよ。私は科学を愛しているから、研究に没頭していてそれでとても今が充実している。あなたにも……………今この時間を無駄にして欲しくないと思つただけ。それじゃ、さよなら」

「薬師さん……………」

その晩、僕はせつかく早くベッドにもぐりこんだのにも係わらず、なかなか寝付けなかつた。

薬師さんがあんな顔をするなんて……………。怒つた顔は何度も見たけれど、あんな寂しそうな顔は初めてだつた。

何のために勉強しているのか……………つて？
テレビドラマや小説にはありがちなセリフだ。

だけど僕は…………それをフィクションの中だけのものとして真剣に自分の問題として考えていなかつたんじゃないだろうか？

あるいは「実際問題として……」という言葉を使って周りから聞いた価値観を鵜呑みにしていただけなんじゃないだろうか？

将来のため、だなんて言っておいて、僕はせいぜい大学受験のことだけでその先のことを何も考えていなかった。

これじゃ、薬師さんに嫌われてもしょうがないよな。

……ちえつ、情けないな。自分の将来の問題のことより、僕は結局薬師さんの気持ちのほうを気にしているのか。だけど。

僕は心に一つ決め事をすると思返りを打って眠りにつくことにした。

次の日の朝、僕は早めに学校に来た。案の定、薬師さんが一人机に向かっていた。

「薬師さん、おはよう」

「ん？ ……ああ、おはよう」

薬師さんは僕の方をちらりと見るとすぐに向き直った。明らかにいつもより冷たい態度だったけれどもそれは予想の範囲内だ。

「薬師さん、僕も昨日あれからいろいろと考えたんだよ」

「……そう」

「僕さ、薬師さんと同じ大学を受験しようと思うんだ」

「え？」

これは薬師さんの不意をついたらしく僕の方を向かせることに成功した。

ただその目には驚きに加えて軽蔑の色が浮かんでいた。

「本気なの？ 単なる冷やかしなら」

「薬師さん。僕はまだ、何のために勉強するなんてはつきりと言う事は出来ない。だけど、その大学を受験するとなればこれから1年と少しの間、必死で勉強するしかないだろ？ そうしたら、きっと見えてくるものがある。少なくとも、もう惰性で勉強するなんてこ

とはしないよ」

「……好きにすればいいわ。あなたのことだから」

そう言っつて薬師さんはふう、と息を吐いて僕から目をそらした。

その表情からは薬師さんの心の内を読むことはできなかつたけれど、僕は彼女の気持ちを期待したかつた。昨日見せたあの態度は僕のことを心配してくれたからなんだと。

薬師さんと同じ大学生活を過ごしたいから、なんて不純な動機は口に出さずに胸にしまっておく。

そのかわり。

「薬師さん」

「何よ」

「もしよければ、今度の日曜日、図書館で一緒に勉強会しようよ」
僕はこれから、もっと積極的に動き出す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9072e/>

少しだけ早足

2010年10月8日15時02分発行